

# 日本の英語科教育における音声指導の現状 —初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して—

太田 かおり

key words : 英語科教育、音声指導、小学校外国語活動、音声教授法、  
臨界期仮説

## 1 はじめに

人間は意志伝達的手段として、主に音声言語（聞く・話す）と文字言語（読む・書く）を用いる。文字を持たない言語は存在するが、音声のない言語は存在しない（窪蘭, 2005）ということからもわかるように、言語にとって音声がいに重要であるか、理解できるであろう。

日本語と英語を音声の観点から比較すると、音声や音韻的特徴に異なる点が多い。日本語は、五つの母音を中心となる音声構造の言語であるのに対して、英語は、子音が重要な役割を果たす言語である。また、日本語は「モーラ拍リズム」、「語ピッチ言語」であるのに対して、英語は「強勢拍リズム」、「イントネーション言語」であり（田中・山西, 2011）、リズムや拍の取り方にも相違がある。言語にはそれぞれに豊かな音声的特徴があり、人間は、音声器官を使って調音点と調音方法を巧みに操ることによって多種多様な音色を作り出している。例えば、英語には24個の子音と30個<sup>1</sup>の母音があるが、子音と母音の音素と音素が化学反応<sup>2</sup>を起こすかのように連なりながら連音や同化を繰り返し、英語特有の音声やリズムを生み出す。英語に特徴的な、複数の子音が連続して現れる音の連なりは、日本語には存在しない音声規則の一つである。

それでは果たして、日本の英語教育において、このような英語の音声規則に関する指導は充分に行われているのであろうか。日本の学校教育において英語教育が開始されて140年になるが、日本の英語教育は音声指導をどのように行ってきたのであろうか。本研究は、この疑問を紐解く第一歩として、現役の

大学生が中学校・高等学校においてどのような音声指導を受けてきたのかについて調査し、その結果を踏まえて考察する。日本の中学校・高等学校の英語科教育<sup>3</sup>における音声指導の現状を明らかにすることが、本論文の主たる目的の一つである。

近年のアメリカでは、外国から多くの移民を受け入れている。当然のことながら、両親の母語が英語ではない子供たちの中には、英語が殆んどわからないという児童や生徒もいる。英語が話せない子供たちに対して、アメリカで最初に行われている英語教育は、「音声指導」である。リーパー（2010）によると、識字教育の一環として行われるアメリカの小学校における音声指導は、“phonemic awareness（音素認識）”の能力を高めることに徹底している。単語がさまざまな音素の組み合わせで成り立っていることに気付くと、音が聴ける、話せる、読めることにも繋がっていく、という研究成果も報告されている。phonemic awareness 理論に基づく音声教育は、「読み書きの土台を作るという大切な役割も担っている（リーパー，2010：12）」のである。

それでは、日本の英語教育における音声指導の実態はどのようになっているのであろうか。まずは、英語科教育における音声指導の実態を調査し、その現状を明らかにする。また、2011年4月から全国の小学校において外国語活動が完全実施されたことに関連して、初期英語教育における音声指導の重要性についても言及する。小学校への外国語活動導入の背景には、臨界期仮説（Critical Period Hypothesis）<sup>4</sup>があると言われているが、音声や音韻形態の認識に敏感であるこの時期には、特に慎重で適切な音声指導がなされるべきであると筆者は考えている。そこで、小学校外国語活動も視野に入れながら、日本の英語科教育における音声指導のあり方について考察を行う。

本論文は、大学生を対象に実施した「英語音声教育に関するアンケート調査」の結果を踏まえて報告する。調査結果の分析を通して、日本の中学校・高等学校の英語科教育における「音声指導」の実態の一端を明らかにするとともに、今後の日本の英語教育界における音声教育のあり方について提唱する。

## 2 本研究の目的

- 1) 大学生を対象に実施した「英語音声教育に関するアンケート調査」の結果から、日本の中学校・高等学校における英語音声教育の実態を明らかにする。
- 2) 「小学校における外国語活動」を視野に入れ、今後の英語音声教育のあり方について、調査結果を踏まえて考察を行う。

## 3 調査方法

### 調査対象者

本研究の研究対象者は、筆者が所属する大学において選択科目として開講している「英語音声学（※授業担当者は筆者）」の受講者33名（男子19名、女子14名）を対象とする。調査対象者の所属学年（人数）は、3年次生（22名）、4年次生（11名）である。なお、「英語音声学」の受講者は、学生本人の希望により選択履修しており、特別な履修条件は設けていない。また、調査結果については分析及び考察を行う旨を事前に伝え、同意を得た上でアンケート調査を実施した。

### 実施期間

授業実施期間：2010年9月末～2011年1月末迄

調査期間：2010年12月中旬～2011年1月中旬

### 調査内容

「調査(1) 中学校・高等学校における音声指導に関する調査」、「調査(2) 音声学に関する調査」、「調査(3) 英語学習に関する調査」の3種類のアンケートに回答する形式で調査を実施した。計37項目の質問項目のうち、本研究では音声に関連する10項目について分析を行い、考察する。

### 調査(1) 中学校・高等学校における音声指導に関する調査

質問1-1：「中学校で発音指導をどのくらい受けましたか」

質問1-2：「高校で発音指導をどのくらい受けましたか」

#### 調査(2) 音声学に関する調査

質問2-1：「英語音声学を学んでよかった」

質問2-2：「英語音声学は、英語学習に役立つと思う」

質問2-3：「音声学（音声の規則）について、もう少し早く学習しておきたかったと感じる」

質問2-4：「英語音声学を学ぶとしたら、具体的にいつ頃から学びたいですか」

#### 調査(3) 英語学習に関する調査

質問3-1：「英語の発音には自信がある」

質問3-2：「英語の会話力には自信がある」

質問3-3：「外国の言語や文化、人に興味がある」

質問3-4：「英語を身につけることは重要で、将来役に立つと思う」

#### 回答方法

調査(1)の質問1-1と質問1-2は、「全く受けていない」、「ほとんど受けていない」、「少し受けた」、「かなり受けた」の4尺度の中から該当するものを一つ選択する形式で、調査(2)と調査(3)のすべての質問項目は、「とてもあてはまる」、「まあ、あてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全然あてはまらない」の4尺度の中から該当するものを一つ選択する形式でアンケート調査を実施した。

## 4 結果

#### 調査(1) 中学校・高等学校における音声指導に関する調査

調査(1)は、中学校・高等学校の英語教育において、音声指導をどの程度受けたかに関する調査を行った。

質問1-1：「中学校で発音指導をどのくらい受けましたか」

質問1-2：「高校で発音指導をどのくらい受けましたか」

表1-1 中学校で発音指導をどのくらい受けましたか (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
全く受けていない	8	24.2	
ほとんど受けていない	21	63.6	87.9
少し受けた	4	12.1	
かなり受けた	0	0	
TOTAL	33	100	

表1-1が示すように、中学校の英語教育における発音指導の実態について、「全く受けていない」が24.2%、「ほとんど受けていない」が63.6%、計87.9%の高い割合の学生が、中学校の英語の授業において十分な発音指導を受けなかったと回答していることがわかった。「少し受けた」は12.1%と少なく、「かなり受けた」と回答した学生はいなかった。

表1-2 高校で発音指導をどのくらい受けましたか (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
全く受けていない	12	36.4	
ほとんど受けていない	16	48.5	84.8
少し受けた	5	15.2	
かなり受けた	0	0	
TOTAL	33	100	

表1-2は、高等学校で発音指導をどのくらい受けたかについて調査した結果を示している。「全く受けていない」が36.4%、「ほとんど受けていない」が48.5%、計84.8%の高い割合の学生が、高等学校の英語の授業において十分な発音指導を受けなかったと回答している。「全く受けていない」と回答した率は、中学時と比較して更に高くなっており、高等学校の英語教育において発音指導が行われていない傾向が更に強まっていることがわかる。「少し受けた」は15.2%で中学時に比べて微増しており、これは大学受験学年に入試対策として発音・アクセント問題を取り扱うためと考えられる。「かなり受けた」と回答した学生は、中学校に関する調査結果と同様にいなかった。

## 調査(2) 音声学に関する調査

質問2-1：「英語音声学を学んでよかった」

質問2-2：「英語音声学は、英語学習に役立つと思う」

質問2-3：「音声学（音声の規則）について、もう少し早く学習しておきたかったと感じる」

質問2-4：「英語音声学を学ぶとしたら、具体的にいつ頃から学びたいですか」

表2-1 英語音声学を学んでよかった (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	20	60.6	97.0
まあ、あてはまる	12	36.4	
あまりあてはまらない	1	3.0	
全然あてはまらない	0	0	
TOTAL	33	100	

表2-2 英語音声学は、英語学習に役立つと思う (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	20	60.6	100
まあ、あてはまる	13	39.4	
あまりあてはまらない	0	0	
全然あてはまらない	0	0	
TOTAL	33	100	

表2-3 音声学（音の規則）について、もう少し早く学習しておきたかったと感じる (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	18	54.5	81.8
まあ、あてはまる	9	27.3	
あまりあてはまらない	6	18.2	
全然あてはまらない	0	0	
TOTAL	33	100	

表2-4 英語音声学を学ぶとしたら、具体的にいつ頃から学びたいですか (n=33)

学習学年	人数 (人)	割合 (%)	小計割合 (%)
中学1年	12	36.4	
中学2年	2	6.1	
中学3年	3	9.1	51.5
高校1年	7	21.2	
高校2年	2	6.1	
高校3年	1	3.0	30.3
大学1年	5	15.2	
大学2年	0	0	
大学3年	0	0	
大学4年	1	3.0	18.2
TOTAL	33	100	100

表2-1から表2-4は、筆者が担当している「英語音声学」の授業受講者に対して、学期の全講義が8割程度進んだ段階（2011年1月中旬）に実施した「音声学に関するアンケート」の調査結果を示している。

表2-1によると、「英語音声学を学んでよかったと思うか」という質問に対して、「英語音声学」の授業を受けた学生のうち、「とてもあてはまる」が60.6%、「まあ、あてはまる」が36.4%、計97.0%という高い割合で「英語音声学を学んでよかった」と回答している。

表2-2は、「英語音声学は、英語学習に役立つと思うか」について質問したところ、「とてもあてはまる」が60.6%、「まあ、あてはまる」が39.4%で、受講生全員が英語の発音や音韻規則について学ぶことは英語学習に役立つと考えていることがわかった。

表2-3は、「音声学（音の規則）について、もう少し早く学習しておきたかったと感じるか」について質問したところ、「とてもあてはまる」が54.5%、「まあ、あてはまる」が27.3%、計81.8%という高い割合の学生が、音の規則について大学3・4年次よりも以前に学習しておきたかったと回答した。「もう少し早く」という時期が、具体的にいつ頃だったらよいと考えるか、については表2-4に結果を示した。

表2-4によると、「英語音声学を学ぶとしたら、具体的にいつ頃から学びたい

ですか」という質問に対して、「中学1年」と回答した割合が最も高く36.4%であった。続いて「高校1年」が21.2%、「大学1年」が15.2%となっており、いずれも中学校、高校、大学の入学初年度に学びたいと考えている傾向が強い。中でも、英語を教科として初めて学び始める中学1年時に音の規則について学んでおきたかった、と回答している割合が全体の三分の一を超えており、最も高い結果となった。

さらに、表2-4を中学校、高校、大学別に見てみると、「中学校」の時に英語の音声規則について学びたかったと回答した割合は51.5%と過半数を超えており、「高校」が30.3%、「大学」が18.2%と続いている。大学生が、自らの英語学習経験を振り返って、より早期の段階で英語の音声規則について学んでおきたかったと考えている傾向が非常に強く結果に現れている。

調査(1)と調査(2)の結果を総括すると、質問1-1と質問1-2の結果から、「英語音声学」を学んだ学生の大半が、中学校・高等学校の英語教育において十分な音声指導を受けてきていない実態が明白となった。質問2-1と質問2-2の結果によると、英語教育において音声の規則を学んでおくことは重要であり、英語学習において有効で役立つと考えていることが明らかになった。また、音声規則を学習する時期については、質問2-3と質問2-4の結果から、中学校、高校、大学入学初年度が適切であると回答している割合が顕著に高く、特に英語学習の初期段階にあたる中学1年時に学習しておきたかったと回答している割合が全体の三分の一を超えており、最も高かった。

英語学習者である大学生の視点から、日本の中学校・高等学校の英語教育の現場において、音声指導が充分に行われていない実態が明らかになったとともに、音声指導の重要性については、「英語学習に役立つ」と認識されており、さらには、全体の81.9%が「音の規則についてもっと早い段階で学んでおきたかった」と考えていることがわかった。なお、英語音声学を学んだ大学生の率直な感想を以下に示す。



### 英語音声学（2010年度）を学んだ大学生の実際の感想（自由記入欄より抜粋）

- ・中学や高校で音声学を学習できる環境があれば、もっと早くから英語を義務的でなく自発的に勉強できたかもしれない。音声学を学び始めて、英語が楽しい、もっと学びたいと思うようになった。音声学を学ぶことは大切だと思う。
- ・音声学を受けて本当によかった。これまで発音の仕方を学ぶ機会がなかったが、授業を受けていろいろと学ぶことができた。
- ・音声学の授業を受けてみて、今まで自分が話していた英語の発音は何だったのか、と思った。以前より細かいところまで意識して発音したり、聴いたりするようになったので、とても役に立っている。
- ・英語音声学は堅い学問かと思っていたが、英語を声に出しながら学ぶことができていると思う。
- ・英語の音の規則がわかってくると意外に面白い。
- ・自分の力で英単語を正しく発音できるようになった。
- ・音声学の授業を受けて、英語の本当の発音の仕方を知ることができた。
- ・英語は中学・高校と習ってきたが、発音をあまり気にしていなかった。
- ・初めてこのような授業を受けて、とても楽しかった。
- ・本格的に英語の音声を学んだのは初めてで、こんなに深い内容だとは知りませんでした。これからの日常会話に活かしたい。
- ・今までは気付かなかった発音のコツがつかめて面白い。
- ・今まで学んだことがなかったので、とても新鮮な感じで授業を受けることができた。
- ・こんなに詳しく音声学を学ぶのは初めてなので毎回難しく大変ですが、面白いです。
- ・中学・高校では、単語を教師の後にリピートすることはあったが、発音記号を見ながらの指導や、母音や子音一つひとつの音などの指導は受けたことがなかった。
- ・この講義を受けて以来、他の英語系講義などで発音する際、自然と舌の動きや位置を意識するようになった。

- ・初めて音声学を学ぶのでとても勉強になり、楽しく学べている。
- ・思っていたよりもずっと面白くて、音声学を学べてとてもよかった。
- ・この講義で初めて発音のことがわかった。
- ・IPAを学び、発音記号を見るのが楽しくなりました。中学・高校でもこのような学習をするべきだと思う。
- ・今までは、読み方が違っているのを訂正されるくらいで、発音についてはほとんど指導を受けてこなかった。
- ・英語を学習する時、音声については後回しになったり、深く学ぶ機会がなかったりしたのでとても勉強になった。
- ・英語を音声の面から勉強するというのは、中学・高校ではなかったことなので新鮮で面白い。
- ・音声学というものがあるとは知らなかったが、学んでみると、これまで食わず嫌いで英語を学んでいたのだと思った。中学・高校で英語の発音は難しいものだ、と思い込んできたが、この講義を受けて、英語の音声規則をしっかりと学べば、思っているよりも難しくないということがわかった。
- ・今まで自分が発音していた単語がこれほど違うことに驚いた。子音や母音一つひとつに発音の仕方があって、その音をきれいに出せるようになったら発音が上手くなると思った。
- ・音声学の授業を受け始めて、普通の英語の発音の仕方も変わった。学んでいて楽しい。
- ・中学からの英語教育にも音声学を取り入れたほうが望ましいと、この授業を受けて感じている。

以上が、「英語音声学」を学んだ大学生の実際の感想である。要約すると、多くの学生が、中学校・高等学校の英語教育において音声指導を受けてこなかったことを挙げており、発音や音声に関する規則を「初めて学んだ」と述べている。さらには、音声指導を中学からの英語教育にも取り入れた方が良いと感じている者も多い。また、英語の音に関する知識を身につけることが「面白い」、「楽しい」と感じている者も多く、自らの力で英単語を読んだり聞き分け

たりできることへの喜びと達成感を感じていることが伝わってくる。現役の大学生が述べた率直な感想を真摯に受け止め、今後の英語教育における現場の指導に反映させていくことを考えなければならない。

### 調査(3) 英語学習に関する調査

調査(3)は、英語学習における発音や会話力に関する自信の度合いと、外国の言語や文化への関心度について調査を行った。調査結果は、以下の表3-1～表3-4に示した。

質問3-1：「英語の発音には自信がある」

質問3-2：「英語の会話力には自信がある」

表3-1 英語の発音には自信がある (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	1	3.0	
まあ、あてはまる	5	15.2	
あまりあてはまらない	8	24.2	
全然あてはまらない	19	57.6	81.8
TOTAL	33	100	

表3-2 英語の会話力には自信がある (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	0	0	
まあ、あてはまる	3	9.1	
あまりあてはまらない	10	30.3	
全然あてはまらない	20	60.6	90.9
TOTAL	33	100	

英語の発音に自信があるかについて調査した表3-1では、「全然あてはまらない」が57.6%、「あまりあてはまらない」が24.2%、計81.8%が「英語の発音には自信がない」と回答した。さらに、英語の会話力に自信があるかについて質問した結果、表3-2では「全然あてはまらない」が60.6%、「あまりあてはまら

ない」が30.3%、計90.9%の高い割合の学生が英会話力に自信がないと考えている。また、「まあ、あてはまる」と回答したのはわずか9.1%と低く、「とてもあてはまる」と回答した学生はいなかった。

表3-1と表3-2より、「英語の発音に自信がない」と考えている学生のほとんどが、「英語の会話力に自信がない」と回答していることがわかった。今回の調査では、2つの項目の因果関係について短絡的に結論づけることはできないが、少なくとも英語の発音に自信を持っていない学習者の多くが、英会話力にも自信がないと回答していることが明らかとなった。

質問3-3：「外国の言語や文化、人に興味がある」

質問3-4：「英語を身につけることは重要で、将来役に立つと思う」

表3-3 外国の言語や文化、人に興味がある (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	23	69.7	
まあ、あてはまる	7	21.2	90.9
あまりあてはまらない	3	9.1	
全然あてはまらない	0	0	
TOTAL	33	100	

表3-4 英語を身につけることは重要で、将来役に立つと思う (n=33)

	人数 (人)	割合 (%)	
とてもあてはまる	24	72.7	
まあ、あてはまる	9	27.3	100
あまりあてはまらない	0	0	
全然あてはまらない	0	0	
TOTAL	33	100	

表3-3と表3-4は、外国の言語や文化に対する関心度について質問した結果である。上記の表3-1と表3-2で「英語の発音や英会話に自信がない」と80%以上の学生が回答した一方で、90%以上の学生が「外国の言語や文化、人に興味がある」と回答し、100%にあたる全員が「英語を身につけることは重要で、将

来役に立つと思う」と考えていることがわかった。

表3-1～表3-4の結果を総括すると、英語に対する興味・関心や身につけることの重要性を強く感じているものの(表3-3、表3-4)、英語の発音や会話力には自信がないと考えている学生が多いことが明らかとなった(表3-1、表3-2)。英語に興味や関心を抱いている学習者が、一方では英語の発音や会話力に自信がないと感じているというもどかしい現状に対して、筆者は、「音声教育」を英語学習の早期段階から適切に行うことによって、解決の糸口にしたいと考えている。なお、英語音声指導の教授法や教材の開発については、現在のところ、日本における研究は十分に進んでいるとは言い難い。したがって、英語教育における音声教授法のあり方についても、更なる研究が求められる。

## 5 小学校の外国語活動における音声の取り扱いについて

2011年4月から、全国の小学校において外国語活動が完全実施されたことについては、前述のとおりである。初年次英語教育における音声指導の重要性を強く感じている筆者は、小学校における音声教育のあり方について関心と期待の念を抱くと同時に、早急な対策が必要であると懸念している。「音声教育」の観点から、以下の考察を行う。現行の小学校学習指導要領(2008年改訂)における外国語活動の目標と音声に関する特記事項は、次のとおりである。

### 小学校学習指導要領(2008年版)における外国語活動の目標

目標：外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。[2-1-目標, 2008: 7] (※下線は筆者による)

### 小学校学習指導要領(2008年版)における音声に関する特記事項

- (a) 児童の柔軟な適応力を生かして、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、聞く力などを育てることが適切である。[2-2-(2) 2008: 10]
- (b) 従来は、あいさつや自己紹介など、音声を中心とした活動が入門期の活

動として行われていた。しかし、こうした活動は、むしろ柔軟な適応力のある小学校段階になじむものである。[2-1-目標-(3) 2008：7]

- (c) 音声面に関しては、児童の柔軟な適応力を十分生かすことが可能である。…（中略）…外国語活動では、外国語のもつ音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切になる。…（中略）…実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより、児童が日本語と英語との音声面的違いに気づくことになる。[2-2-3-(1) 2008：12]

## 6 考察

### 小学校における外国語活動が抱える問題点

小学校の外国語学習が、国際理解教育の一環として導入されたとはいえ、「英語を取り扱うこと」を原則としており、音声言語を中心とした活動を行うことが求められていることから、これが実質的な英語音声教育のイントロダクションにあたることは間違いない。上記の学習指導要領にも示されているように、小学校の外国語活動では、コミュニケーション能力の育成と音声感覚の育成が主たる目標として掲げられている。小学校への外国語活動導入の背景には、臨界期仮説（Critical Period Hypothesis）があることは前述したとおりであるが、音韻形態の認識に敏感であるこの時期は、特に慎重で適切な音声指導がなされるべきであると筆者は考えている。なぜなら、学習に関わる個人要因（学習者要因<sup>5</sup>）の中でも、「年齢」要因は変わりにくい要因、すなわち本人の努力や教育的介入によっては変えることができない要因であるため（小嶋他, 2010）、この時期に適切な指導が行われなければ、高い到達度が期待できなくなる可能性があるからである。

音声教育の観点から見ると、早期英語教育を行うに至った小学校教員へ課せられた責任と負担は大きい。早期英語教育が、音声敏感期に音声を中心として指導を行うのであれば、発音指導に携わる指導者は、音声に関する基礎的な知識と指導技術を持ち合わせていることが重要となる。しかし、そのための具体的な研修制度や指導者育成の対策は十分に講じられないまま、日本の小学校で

は、2011年4月から外国語活動が完全実施されている。

全国の小学校教員(40万人)のうち、中学・高等学校の外国語(英語)の教員免許状取得者は、「公立小学校で3.7%、私立小学校で4.0%、国立付属小学校で1.9%(菅, 2011: 100)」という現状からもわかるように、英語教育に精通した小学校教員はわずか一握りである。英語教育の専門家ではない指導者が「音声を中心に扱う」のであれば、その教育が効果的に実現できるよう、また、現場の需要に対応するためにも、豊富な音声教材の開発や指導法の研究が急務である。

### 初期英語教育における発音指導の重要性

日本語と英語の音声形態の違いを示す一例として、「イカ」を逆さまから言うとうどうなるかについて考えてみたい<sup>6</sup>。日本人の多くは、「カイ」と答えるであろう。しかし音声学的には、「アキ /aki/」も正しいことになる。「イ」+「カ」の2つの音が含まれていると考えるのは、日本語の「50音」に基づいた数え方である。しかし音声学的には、/i/+/k/+/a/の3音が含まれているため、「イカ /ika/」を逆さまから読むと「アキ /aki/」になるのである。このように、日本語と英語では、音の単位の認識の仕方に違いがある。日本語は「ア、イ、ウ、エ、オ」の5つの母音(V)が中心となり、子音(C)には必ず母音が後続する音声形態となっている<sup>7</sup>が、英語は複数の子音が連続して現れることが特徴的であり、これらの音声規則の相異については大いに学ぶに値する。また、母音や子音の単音に関する知識に加えて、アクセントやリズム、イントネーションや連音などの超分節特徴の習得も不可欠である。しかし、このような日本語と英語の音声規則の違いも含めて、中学校や高等学校の英語科教育において十分な指導が行われていない実態が、本研究により明らかとなった。

筆者は、学校教育において中学生に英語を教えた経験を有する。中学1年生を担当した時は、特に音声指導に留意し、英語学習初期にあたる4～6月の3ヶ月間は、徹底した英語音声指導を行った。英語の子音や母音の音に加えて、調音方法や英語特有のリズムについて集中的に授業を展開した。筆者の経験では、英語学習の初期段階で十分な指導を受けて体得した発音や音韻感覚は、そ

の後の継続的な英語学習を通じて強化されながら磨かれていき、失われることはなかった。英語教育初期段階における音声指導は極めて重要であり、この段階で英語教師が音声に関する一定の正しい知識や感覚を学習者に身につけさせることは、この時期の学習者を担当する指導者に委ねられた使命の一つである。初期段階の英語教育に携わる者はこのことを認識し、その責務を果たすことが求められている。特に、発音習得に関する臨界期仮説や敏感期仮説を考慮するならば、初期段階の英語教育における発音指導は、後回しにしてはならない指導内容の一つである。コミュニケーションにおいて「発音」は絶対的な要素ではないが、かなり重要な要素の一つであることは確かである。初期英語教育において「流暢な発音」の基礎を築けるかどうか、指導者の手腕が最も問われるところである。

## 7 まとめ

本論文は、日本の英語教育における音声指導の現状に焦点をあてて考察を行った。本研究における調査結果は、英語音声指導に関する非常に深刻な現状を浮き彫りにした(表1-1、表1-2)。

言葉の教育は、流暢な発音を身につけることよりも、話す内容に豊かさやメッセージ性がなければ意味がないのではないかと、という指摘があるかもしれない。確かに、発音よりも話すべき内容の方が一層重要であるという考えには同感である。しかし、本論文の深意は、英語教育において音声指導こそが重要であるといった短絡的なものではない。英語教育の現場で、発音指導を含めた音声教育が充分に行われずして、「日本語訛りでもよい」、「発音なんか悪くても、言いたいことが通じればよいのだ」といった考えが横行していることに、警鐘を鳴らしているのである。問題なのは、発音に関する指導が適切に行われていない現状である。発音指導が適切に行われずして、「カタカナ英語でよい」と言うのであれば、それは本質を取り違えていると言わざるを得ない。無知を内省すべきであり、開き直ってはならない。すでに述べてきたように、日本語と英語の音韻構造や音声規則、さらには発音する際の調音点や調音方法には異なる点が多い。したがって、これらの違いについては、英語の文法規則に関す



る違いを教えるように、必ず行われなければならない指導であると筆者は考えている。コミュニケーションにおいて、話の内容の豊かさは勿論のこと、音声の流暢さと適切さを兼ね備えていることがより望ましいことは言うまでもない。国際社会における英語音声のあり方について、「英語は国際語であり、国際的に通用する英語を発音する必要がある（見上他，2011：205）」という見解も示されている。英語教育においてまず優先すべきことは、日本語と英語の音声的特徴の違いや英語の音韻規則について適切な指導を行った上で、それらの音声規則の基本的知識に基づいて、自らの意見や考えを相手に伝わりやすく話すことを心がけさせることではないだろうか。

果たして、日本の初等・中等教育を終えた英語学習者は、どの程度の質的・量的な音声教育を受ける機会を得てきたのであろうか。初等・中等教育における英語教育が「英語科教育」である限り、この段階で英語教育に携わる者の使命は、特定の技能向上に特化した教育を行うことのできる英会話学校や専門学校のそれとは異なり、必要な指導に怠りがあってはならない。特に音声認識に敏感な初年次教育の段階においては、英語の音声と音韻規則の体得を促すべく音声指導が不可欠であるが、日本の英語教育では、この点の認識が十分に深まっていないことが問題であると考えている。

図書館に「日本式英語でかまわない」、「話せるだけが英語じゃない」というタイトルの本が並んでいた。日本人は英語の発音が苦手であるということを目にすることがあるが、その原因は、日本人の性格的特性や母語の影響であると説明されることが多い。しかし筆者は、日本の英語科教育において、音声指導が適切に行われていない実態に大きな問題があると考えている。十分な英語音声指導が行われていない中学校・高等学校の実態については、本研究の調査結果が明らかにしたとおりであり、英語学習者の87.9%が中学校において、84.8%が高等学校において音声に関する指導や音の規則に関する授業を「受けていない」と回答した。

小学校に外国語活動が導入された背景には、臨界期仮説があると言われていることについてはすでに触れたが、その効果が発揮されるためには目的にかなった適切な指導が行われてこそ初めて意味をなす。近年の英語教育では、発

音の accuracy (正確さ) よりも fluency (流暢さ) を重視する時代となったが、ここでいう fluency (流暢さ) とは、内容の適切さも踏まえた自然な英語の流れのことであって、日本語の音声規則を流用して「とにかく喋ればよい」というような勢い任せの片言英語とは、本質的に意図しているものが異なっていることに留意しなければならない。

指導者が「発音に自信がないから」、「英語の音声規則を知らないから」などの理由で、英語の音声指導が行き届いていない可能性があるとするれば、それは日本の英語教育にとって大きな弊害であり、考え直さなければならない問題である。今後は、具体的な音声指導法の研究や実際に活用可能な音声指導用教材の開発と充実が求められる。また、英語科の教職課程では、現在のところ、英語音声学は必修科目ではなく選択科目であることも問題点として指摘できる。必修科目ではないため、英語音声学を学ばないまま英語教育に携わっている教員も少なくなく、今後は必修化へ向けた検討も必要である。英語の音声規則を知らない英語教員が、適切な音声指導を行うことは難しい。不幸なのは、音声規則や英語特有の音律について学ぶ機会を逸した学習者である。学習指導要領や教科書に、英語の音声指導に関する具体的な記述が少ないこともまた別の問題点として挙げられる。今後は、音声教育の指導方法や指導内容について具体的に明示して記載することも検討が必要であろう。初期段階における音声指導の重要性に対する認識を深め、音声指導法を探究し、日本の英語教育における音声指導への更なる関心を高めていくことが求められる。

## 8 今後の課題

今回の調査結果が日本の英語科教育全体における傾向であるか否かについては、母集団が小さいため現段階で一般化することは難しい。しかし、日本の中学校・高等学校の英語科教育を経て大学へ入学してきた「英語学習歴6年間」の英語学習者による音声指導に対する率直な意見には、耳を傾けるべきであろう。今後は、他の教育機関も含めて調査対象を広げ、音声指導の実態を更に考察する必要がある。また、今回の調査結果を踏まえて、今後は小学校の外国語活動における音声指導の実態についても調査を実施したい。初等・中等教育に

における音声指導の現状分析を行うとともに、現場が直面している問題点についても情報の集約を行い、解決策を検討したい。さらには、効果的な音声指導が行えるよう、音声指導用教材の開発、カリキュラムの設計、及び指導法の確立を目指した更なる研究を行う必要がある。

本研究の調査を通じて、これまでの日本の英語科教育において音声指導が充分に行われてこなかった実態が明らかとなった。日本の英語教育界における音声指導に対する認識は、全般的に甘いと言わざるを得ない。英語教育に携わる我々指導者は、この現状をまず認識することが肝要である。その上で、音声指導の有用性に関する認識を高め、理解を深めるとともに、その指導法と指導技術の向上を図らなければならない。そのためにも、英語教育において音声指導がどのように位置づけられ、どのように指導されているかについて更なる調査・研究を行い、その有用性について持続的に提唱していく必要がある。日本の英語科教育において適切且つ効果的な音声教授法を確立すべく、“phonetic and phonemic pedagogy”の必要性を強く強調して、本論文を締めくくることとする。

## 表一覧

- 表1-1 「中学校で発音指導をどのくらい受けましたか」に関する結果
- 表1-2 「高校で発音指導をどのくらい受けましたか」に関する結果
- 表2-1 「英語音声学を学んでよかった」に関する結果
- 表2-2 「英語音声学は、英語学習に役立つと思う」に関する結果
- 表2-3 「音声学(音声の規則)について、もう少し早く学習しておきたかったと感じる」に関する結果
- 表2-4 「英語音声学を学ぶとしたら、具体的にいつ頃から学びたいですか」に関する結果
- 表3-1 「英語の発音には自信がある」に関する結果
- 表3-2 「英語の会話力には自信がある」に関する結果
- 表3-3 「外国の言語や文化、人に興味がある」に関する結果
- 表3-4 「英語を身につけることは重要で、将来役に立つと思う」に関する結果

## 注

- 1 英語の母音の数については研究者によって見解が異なるが、本研究は「英語音声学入門（竹林・斎藤，2009）」に基づいて、母音の数を記載している。英語には、短母音6個、長母音5個、二重母音11個、三重母音3個、弱母音5個で、合計30個の母音がある。
- 2 単音間や語間等における音の変化については、寺島（2000）の第2章「英音法における化学変化：21-35」に詳しい。
- 3 英語科教育と英語教育の違いは、学校教育の一環として行われているかいないかということである。本論文では、文部科学省が定めた学習指導要領によって行われる英語教育を英語科教育として表記している。
- 4 臨界期仮説（Critical Period Hypothesis）とは、外国語学習には臨界期があり、臨界期を過ぎると学習が不可能になる期間がある、という考えに基づいた仮説である。臨界期に関する見解は研究者によって異なるが、臨界期は思春期（12-13歳）までと考えられており、その時期を過ぎるとネイティブのような言語能力を身につけることは不可能になるとされている。発音の習得に関しては6歳までが臨界期であるとする立場もある。日本でも、小学校に外国語活動（英語教育）を導入する背景には、このような考えが影響していると考えられている（白井，2010）。また、敏感期仮説（Sensitive Period Hypothesis）と言われることもあり、「年齢」要因が発音などの到達度に顕著な影響を与えることが指摘されており、ある一定の年齢までに集中的に学習が行われなければ到達が困難になるという仮説である（小嶋他，2010）。
- 5 学習者要因には「年齢」、「性差」、「適性」、「学習スタイル」、「動機」、「メタ認知」、「学習ストラテジー」などがあるが、このうち、「年齢」、「性差」、「適性」、「学習スタイル」はその性質が変わりにくい要因として分類されている（小嶋他，2010）。
- 6 音と文字の関係について、川越（2007：47）は音節と単音を例示し、詳しく説明している。
- 7 但し、日本語の母音と「ん（N）」については単独で現れることができる。

## 参考文献

- 大津由紀雄（2006）『日本の英語教育に必要なこと』慶応義塾大学出版。  
大津由紀雄、鳥飼玖美子（2009）『小学校でなぜ英語？』岩波書店。  
金森 強（2012）「小学校外国語活動に求められるものは何か」『英語教育』60(11), 10-12。  
川越いつえ（2007）『英語の音声科学』大修館書店。  
菅正隆（2011）『日本人の英語力—それを支える英語教育の現状—』開隆堂出版。

- 窪園晴夫 (2005) 『音声学・音韻論』 くろしお出版.
- 小嶋英夫、尾関直子、廣森友人 (2010) 『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習—』 英語教育学大系 第6巻、大修館書店.
- 塩澤利雄・伊部哲・園城寺信一・小泉仁 (2005) 『新英語科教育の展開』 英潮社.
- 白井恭弘 (2010) 『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得への招待—』 岩波書店.
- 竹林滋、斎藤弘子 (2009) 『英語音声学入門』 大修館書店.
- 田中英理、山西博之 (2011) 「英語音声学・音韻論的特徴の習得を目指した授業の効果検証」、JALT Journal, 33(1), 49-66.
- 寺島隆吉 (2000) 『英語にとって「音声」とは何か?』 あすなろ社.
- 見上晃、西堀ゆり、中野美知子 (2011) 『英語教育におけるメディア利用—CALLからNBLTまで—』 英語教育学大系 第12巻、大修館書店.
- 文部科学省 (2010) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編 平成20年改訂版』 東洋館出版.
- 文部科学省 (2011) 『中学校学習指導要領解説 外国語編 平成20年改訂版』 開隆堂出版.
- リーパーすみ子 (2010) 『アメリカの小学校ではこうやって英語を教えている』 径書房.